

蜂須賀正韶と笛子

——下田歌子研究(二)——

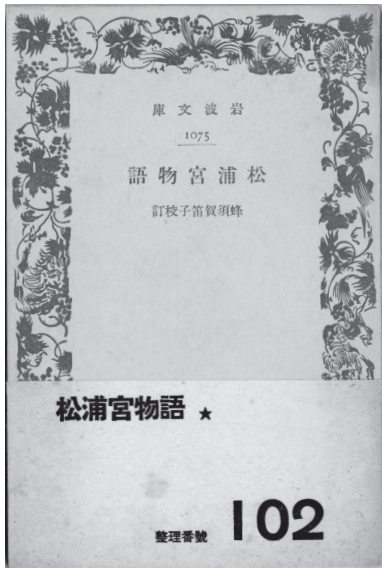
「實踐國文學」九一号では、蜂須賀家の人々を紹介し、蜂須賀正韶と実践女学校との関わり、次女笛子と下田歌子の関係を考察した。本稿では笛子の著作である『松浦宮物語』（岩波文庫一〇七五）と自筆草稿『春の旅』を紹介したい。

『松浦宮物語』

蜂須賀笛子校訂による『松浦宮物語』は、岩波書店から昭和十年（一九三五）一月に出版された。巻末に「昭和九年十二月 笛子」と記されている。以下、本稿では岩波文庫本と表記する。この著作は、蜂須賀家に伝来する『後光厳院宸翰松浦宮物語』を底本として校訂し、翻刻、解説を

大井 三代子

書いたものである。また小山田与清著の『松浦宮物語考』を付録として掲載している。



岩波文庫『松浦宮物語』

『後光嚴院宸翰松浦宮物語』は、弘文莊反町茂雄が蜂須賀家から入手し古書即売会に出品、昭和四十六年（一九七二）には文化庁の所管となり、国立博物館で保管されている。また昭和五十六年（一九八一）には影印本が古典籍複製叢刊行会（雄松堂発売）から刊行された。

『後光嚴院宸翰松浦宮物語』の書誌については、笛子の解説や影印本の解説に詳しく書かれているので、ここでは簡単に記しておく。笛子の解説では、大和綴としているが、影印本の解説では粘葉装としている。第一巻には書名が無く、第二巻には「松浦宮」とある。料紙は白紙、色紙（藍と紫）、雲紙の三種類である。本文は十二行、または十三行で、書かれている絵は紅葉に菊、卯花垣根に時鳥が鳴き行く様などで同じ絵はない。葦手書もあり、水辺の岩に文字を隠している。復刻版では、原本に合わせて一部分を色刷りにしている。装飾性のある 美しい本で、鎌倉期に作られたと考えられている。

この物語は、『無名草子』に「又定家少将の作りたるとてあまた侍りめるは、ましてたゞけしきばかりにて、むげにまことなきものに侍るなるべし。松浦宮とかやこそひとへに万葉集の風情にて」とあるので、作者は藤原定家とする説もあるが明言できない。また『無名草子』には藤原隆信作の『うきなみ』の次にこの物語をあげ、次に今の世の

物語に言及しているので、平安末期、十二世紀後半の成立と見られる。正三位大將橘冬明と明日香皇女との間に生まれた主人公氏忠は容貌が良く、詩や管弦などの才に優れ、十六歳で式部少輔右小弁中衛少将を兼五位上となった。『松浦宮物語』という題名は、この主人公が唐に渡る時に彼の母が詠んだ和歌「今日よりや月日いるをしたふべき松浦の宮にわが子待つとて」による。

三巻から成り、内容は神南備の皇女との恋と渡唐、華陽公主との愛、戦乱、唐の母后との愛、帰朝後の公主との再会と終結で構成されている。恋物語かと思いつながら読み進めると、琴の秘曲を授かるという話になり、物語の展開が不思議な世界を醸し出し伝奇小説のような様相を見せたかと思うと戦乱の場面が詳細に語られる。どこに物語の中心があるのかわかりにくいものになっている。物語の舞台が唐にまで広げたとところにスケールの大きさが見られる。琴の秘曲の伝承は『宇津保物語』の「俊蔭」の模倣である。

笛子は、『松浦宮物語』の異本考証ということはほとんど試みられなかったとして、諸本を次のように三種に分け、各本について考察し、異本考証をしている。三種の内容を次に記しておく。

第一種 三巻一冊本

一 蜂須賀家本傳後光嚴院宸翰 一、二、三、三卷 一冊

二 後花園院宸翰本 三卷 一冊

三 無窮会本 三卷 三冊 寫

四 内閣文庫 三卷 一冊 寫

笛子は「未だ見るを得ない」と記している。

第二種 三卷三冊本

一 阿波國文庫本 上中下 三卷三冊 寫

二 宮内省圖書寮本 上中下 三卷三冊 寫

三 静嘉堂文庫本 上中下 三卷三冊 寫

第三種 上下二冊本

一 宮内省圖書寮本 一冊 寫

二 静嘉堂文庫本 他と合冊 寫

一種には傳後光嚴院宸翰（蜂須賀家本）と後花園院宸翰本があり、無窮会本は蜂須賀家本を模写したものである。笛子は疑問として、第一に後光嚴院宸翰というのは誤りで、それは後花園院宸翰の誤りであるか。第二にその反対であるか。第三に後光嚴院宸翰本のほかに、後花園院が模写した本が存在したのか、と疑問を提示している。また蜂須賀家本の箱書が相当古いこと、本の筆跡が浅野侯爵家所蔵の『枕草子絵詞』の同じ院の宸筆とされているものと似通っていることを記している。

蜂須賀家本が岩波文庫の中の一冊として世に出たこの意義は大きく、萩谷朴は、『松浦宮全注釈』の中で「近代における研究成果として、学会に最大の影響を与えたものは、何といても、蜂須賀笛子氏の蜂須賀本翻刻とその解説（岩波文庫本、昭和十年一月刊）である。それまでも、続群書類従所収の『松浦宮物語』によって、黒川、藤岡、野村、吉沢、山岸、桜井氏等の研究は行われていたが、蜂須賀本の翻刻によって、この物語に対する研究は急速に侵攻」したと述べている。新たな研究論文が発表されただけではなく、演習のテキストにも用いられた。実践女子大学では、山岸文庫、常磐松文庫、黒川文庫に『松浦宮物語』を所蔵している。

萩谷朴は、岩波文庫本と諸本を校合するうちに、岩波文庫本には釈文の誤りが少なくないことに気づき、元本を調査したいと考えた。昭和十六年頃に、蜂須賀家本の調査を願ひ出たが、一時的に所在が不明になっていたようで、徳島、芝高輪の邸宅にもないといわれたと書いている。後に萩谷は、竹田本（伝伏見院宸筆本）と対校して、蜂須賀家本には脱落があることがわかり、蜂須賀家本・竹田本を相互に補えば作品の全文を知ることができるとし、『松浦宮物語』（角川文庫 角川書店 一九七〇）では蜂須賀家本の脱落部分を竹田本で補った。反町茂雄が古書即売会に出

品した時に萩谷は閲覧を願ひ、実際に蜂須賀家本を見て岩波文庫本の誤りを確認し訂正した。平成四年（一九九二）に吉田幸一は、竹田本の影印と後光嚴院宸筆本とを対校、釈文と解説を記して古典文庫から「古典聚英六」として刊行した。

附録の小山田与清著『松浦宮物語考』は、凡例によると徳島市光慶図書館に所蔵されている旧阿波国文庫蔵の著者自筆本である。巻末に「松浦宮物語考依 阿州侯之命所撰上也 文政十二年八月十六日」とあり、当時の藩主斉昌の命によって書いたものである。この本に文政十年とあるもので、この頃から蜂須賀家に伝来したのではないかとしている。小山田与清は、『松浦宮物語』が『隠蓑物語』の名をひいていることから、偽跋一の「貞観三年四月十八日、染殿の院の西の対にて書きおはりぬ」ということが荒唐無稽な擬古的意図になったものと指摘し、また『風葉集』がこの物語の和歌十九首を採取していることを述べた。

国学者である小山田与清は天明三年（一七八三）に武蔵国小山田村に生まれた。彼は漢学を古屋昔陽に、国学を村田春海に学んだ。平田篤胤・伴信友とともに、国学三大家といわれた。高田与成の養子となり高田姓を名乗るが、後に小山田姓にもどった。明治から昭和の政治家、高田早苗は孫に当たる。弘化四年（一八四七）に没した。書籍を所

蔵する書庫をつくり、それを擁書楼と名づけ、国学者の閲覧に提供した。小山田与清は多くの知友を得ており、国学者の屋代弘賢もその一人である。二人の交友には愛書家が多く、文庫を構えているものが多い。屋代弘賢の蔵書の一部が蜂須賀斉昌に買収されて阿波国文庫に入った。柴野栗山を通して斉昌に知遇を得た恩顧による。柴野栗山も阿波国文庫に買収された。

笛子が、岩波文庫本のための翻刻、校訂、解説などをつから始めたか不明である。笛子は昭和五年に離婚、昭和八年一月に父の正韶が死去している。岩波文庫本の底本とした本は蜂須賀家に伝来しているもので、出版の許可は蜂須賀家の当主である正韶の許諾を得なければならず、正韶の死去以前のことになる。誰が岩波文庫の一冊としていれるように勧めたのだろうか。また校訂を笛子がすることになったのは、正韶が笛子の文学的才能を認め、離婚した笛子を案じて、何か取り組む仕事として考えたのだろうか。いずれにしても出版の経緯は不明である。

住所が「東京市赤坂区榎坂町五」となっている笛子宛ての書簡が三通残されている。（ ）の数字は下田資料の番号である。昭和八年七月三日付けの書簡（九一七）では、宛先を「芝区三田綱町九」と書いたところを「赤坂 榎」と付け加えているので、昭和八年七月頃に赤坂榎木町に移

『春の旅』

転したと思われる。名刺に書かれた書簡（九〇二）には、移転を祝う言葉があるので赤坂榎木町に移転したことを祝ったものではないかと考える。また「手術を大切に」とあるので、昭和十一年（一九三六）、妙義に行く前のものではないかと推測している。正韶が死去し、笛子の健康状態が良くない中で、出版のための原稿を書くのには、相当の時間を必要としたと思われる。

八月二十四日付の書簡（九一三）では笛子に会って嬉しく名残がつきなかった。その時に写本を見せてほしいと依頼されたのか、歌子は熱海に行くので写本を送るのは三十日まで伸ばしてほしいと書いている。この宛先も赤坂区榎木町なので、『松浦宮物語』に関する写本を歌子が所蔵していて、それを見たいと希望したのではないか。そのような想像ができる書簡である。

昭和十一年八月四日付けの下田歌子から笛子に宛てた書簡（九二〇）によると、笛子（扶盈子と表記）は群馬県妙義町麦や旅館で病氣療養をしていた。退院後は快方に向かっているのをうれしく思うと書かれている。岩波文庫本を出版した後に、元来が病弱だった笛子は病氣になり入院、東京の夏の暑さをさけて療養するために妙義に來たのだらう。歌子が昭和十一年（一九三六）十月に死去、昭和十二年（一九三七）に笛子は、渋谷区千駄ヶ谷にて死去した。

『春の旅』は蜂須賀笛子の自筆草稿である。『春の旅』は、浅草から太田までの車中の様子や講演会のことなどを書いた紀行文である。作者名の「竹由子」とは、笛子の字を「竹」と「由」に分けてペンネームにしたものである。

この草稿は半紙九枚に書かれており、現在は半紙を二つ折りにして、右上の角をこよりで綴じて一括し、下田資料として保管されている。巻末に掲載した『春の旅』の図版は、二つに折った半紙を開いたものである。

大正十年四月二十三日に、下田歌子が群馬県新田郡太田町で講演をすることになり、笛子は同行することになった。明治二十九年（一八九六）の郡制で、新田郡は太田町、尾島町などの四町と九合村などの九村からなる。また『春の旅』の文中にある群馬郡は、高崎町、渋川町などの六町と大類村などの三十三村からなる。

次に『春の旅』の翻刻を記しておく。翻刻にあたって文中に傍線や点で文字の修正削除を示した見せ消ちは、該当する文字の左側に傍線を引き、修正をしている文字を（ ）に入れ、また削除している文字は（削除）と記した。上部のアラビア数字は図版の枚数を示したものである。

春の旅

竹 由子

1

四月二十三日またきよりけはひなと
してけふの旅路をよろこひつ
わか家のことは心にかゝりながらも
さりとはなほ幼なの心なりや
せの君に送られまゐらせて
くるしき時間を浅草に

つけは汽車は、や出てむとす

常にならぬことなればつく息

もくるしき込に急きにいそぎつ

師の君の御顔を見まゐらせ

し時のうれしさよひとりとり

のこされたらんにはと思ふに

いとおそろしくそおほえし

一行は師の君を初めて長田の君

高橋第一部長の君他の車には

竹内の君井上の君など八九人

なり車の進むほとに四方のけしき

ひらけわたりていとうるはし

くらきまでけふりこめたる都より

しはしのかる、けふの旅かな

3

西新井まふつる人やさりならん

こ、のうまやちにきはひにけり

皆々ものかたりに打興するほとに

師の君はうちゑみつ、御歌かき

つけておこすまたしきかくとせめ

給ふに猶よめすはや粕壁わたり

になりぬ

紫の藤のゆかりに名をき、し

かすかへわたり桜ちるなり

なとおもふうちに杉戸を過ぎぬ

長田の君目さしく見つて

かれはふしにこそはとのたまふ

おもひもかけすめつらしく今朝

までも村雨のふりし空ともおほ

えす雲のあはひより顔のみ出して

歌をとそ、のかすかことし師の君

(御歌)

さるにてもいとはやうもよみ給ふもの

かなとおもふにわかいはんとすること

皆のたまひはて、少しものこい給は

ぬそねたきや

富士つくは右^{ママ}みきりにそゝりたつ

春の大空かすみわたれり

かくて「かぞ」といへるにつきぬ加須と
書くなり

かぞと曰ふ名さへなつかしはく、みし^{家尊}

親木のかけのわすられなくに

川俣このわたりに茂林寺といふ寺あり

例のあやしき釜のいはれを傳へ

しところなり次の車にてもいと賑は

しく發句川柳などゝのゝしり

あふ足利町といふ所（削除）は絹物の出る

ところなりときく太田につけは群馬

馬原支部長の君を初めてあた（削除）また

の出むかへあり自動車にてまうけの

家に至りていこふ 師の君はつか

れませるさまもなくたちにける群馬

郡の方々にものかたらせ給ふ窓に

近く御社ありこれそ高山神社

なりといふにおのつから額も下る心地

すその後に新田神社ありとかや

直ちに電氣館にて講演をし給ふ

新田郡處女等の聯合會と愛国

婦人會の支部と合はさりしもの

にていまた学ひやも三四年かほと

とおほゆる子もありたらちねの親（母）

かわか手にいたきて乳をふくめつゝ

はやくおひ出、君の為にも国の

為にもと説き、かするかことく師の

君の御言葉は強きかと思へは

やさしく弱きかと思へは熱して

われとわか心にて引入しられてこゝに

あつまる人のみにてもまことにこれを行

ひたらはと涙くましうなりぬ

聞く人も皆師の君をうちまもりて

一言もき、もらさしとするそいち

らしきひるけたうへて又ひとしきり

講演ありこれはや、年もたけて

十八九のほとなれば今少しむつかし

きことを心に入るやうにかたらせ給ひ

てやかて汝たちも母となるへき身の子

のよしあしは父よりも母にこそあるを

おもひておのかし、わか心よりかため

給へと願ひ給ひぬそれより大講^{ママ}

院とやらに至りぬ皇太后宮の御座所

となりしころとてみす打かけしあり
 前に不鳴池といふありいはれをきけは
 昔吞龍和尚の衆生のためとてこゝに歌をよみ給ひ
 し時池の蛙のいとかしましくなきて
 うるさくみ出されければわれ一人の為
 ならてこゝに歌をよむそとて鳴くね
 をとゝめしめ給ひきとて今もなか
 すとかいふなるこのわたり松林にて
 秋には松茸のいとよしとていふなる
 金山城のあとまぢかに見えてわか同志の
 御方にまみえまゐらせし心地していと
 なつかし

いろ／＼のみとりにみえし金山の
 大城のあとをうちあふきつゝ、
 本堂には東照公の御像あり千羽鶴
 の図などありていともの／＼しけれどさひし
 中島飛行機成作所ありこゝも
 見むとおもひしものを帰りの時間に
 せまられて門のみ行きすぎぬ
 かくて汽車にのるにあまた見送るあり
 中にはたゝ一度の講演に御顔
 見しりしをとめらもみな礼

してゐたりぬいといちらし
 乗り参らせたりし陸軍大尉の
 人のしきりにものかたりして
 この金山の城の要害も今の
 戦術にことならず昔も今も秀て
 たる人には感すへきふしありなど
 いふ新聞の群馬版を見せられぬ
 中にけふのことを書いて花のこと
 き三千の少女とあるを師の君
 いとめつらかなる話なりや都ならば
 さもいはめとわらはせ給うげに
 白きものもつけす髪なともいとすみつけ
 うとりあけしものをと思ふに
 をかし
 さるほとにまとの外はくらうなり行
 きておもはぬ方に月さし出てぬ
 まとかなる月こそそのほれ夕日かけ
 残る光も消えはてぬまに
 このまともに見えしと思ひし月は又
 あなたのまともひかりなけつゝ、
 わか車すくにはしると思ひしを
 ひたりみきりに月ぞ見ゆれる

かくて七時する頃に浅草につきぬ
 家にかへりてけさは（削除）送り給ひし
 かしこまりをいへはせの君は（削除）今
 更とはあやしきそその折はしら
 ぬかほにひとりのこして乗りし
 ものをと打ちわらひて恨み給ふ
 いとをかし
 袋の口をくつろけて絵葉書な
 と、り出て、けふのものがたりに
 いたく更しぬ

この中に御歌や長田の君の御歌
 さも織りませて少しは錦とも
 見せさせ給へ編集所に出さんには
 今一度書直し候らはん竹由子
 といふはあからさまに名を出すことの
 いとはしさに笛子といふ字を二つ
 に解して候何か他によき名も候
 らはその名の名つけ親になり給ひてよ

あなかしこ

文中三枚目の和歌「富士つくは右みきりにそゝりたつ」

の「右」は「左」の誤りである。太田へ向かう車中からは富士山を左に、筑波山を右に見る。また五枚目の「大講院」は「大光院」の誤りである。

本文にそつて旅の様子を見ていきたい。まず四月二十三日の早朝に、今日の旅のことを喜び、楽しみに心をはずませている心の内を幼い子どものようにだと笛子は思っている。家の事を気にしながら夫に見送られて家を出たが、浅草駅に着いたのは汽車の発車時間にぎりぎりであった。苦しいほどに息をはずませながら急いで行くと師の君―下田歌子の顔が見えて嬉しく、一人取り残されていたらどうしようかと内心おそろしく不安に思っていたのでほっとしたのである。東武鉄道の西新井、粕壁（現春日部）、杉戸（現東武動物公園）、加須、川俣、足利を過ぎて太田までの車中は、外の景色を眺めながら、和歌や俳句、川柳を作った。歌子から、早く和歌を作りなさいと言われ、和歌の題材がみなに使われて思いつかず困る様子も書かれている。笛子の和歌「かぞと曰ふ名さへなつかしはく、みし親木のかけのわすられなくに」の「かぞ」は駅名「加須」で、その音「かぞ」に「家尊」を当てて「子を育みし親」としたのである。茂林寺の「あやしき釜のいはれ」とあるのは、茂林寺に伝わる昔話「分福茶釜」のことである。

「上毛新聞」大正十年四月二十五日の記事「新田婦女總

會「二千婦人會同」によれば、歌子たち一行は十時四十分
に太田に着き迎えの自動車に乗り、用意された家に行き休
憩をし接待を受けた。

休憩所の家の窓の近くには高山神社がある。高山神社は、
高山彦九郎を祭神として祀った神社である。高山彦九郎は
延享四年（一七四七）に上野国新田郡細谷村（現群馬県太
田市細谷町）に生まれた。吉田松陰、高杉晋作等に影響を
与えた勤王思想家で、高寛政五年（一七九三）、地元民が
政府に神社創建を願ひ出たことから、明治十一年
（一八七八）に高山彦九郎に正四位が追贈され、社殿創建・
社号公称願ひが大久内務卿より許可された。翌年明治天皇、
各皇族の下付金、一般の寄付を得て、金山丘陵の支脈の小
丘である天神山中腹に社殿を造営し、鎮座を行った。

休憩の後に歌子は電気館で講演を行った。電気館は群馬
県新田郡太田町字太田九九六（現在の太田市）にあり、常
設映画館としてあった。通常は映画を上映したが、講演会
場として提供された。

電気館は、明治三十六年（一九〇三）に、東京市浅草区
浅草公園六区に、日本で初めての年中無休の常設活動専門
館として開業した。明治四十二年（一九〇九）に改装した
時の定員は二千二百であった。次いで明治四十年
（一九〇七）、京都の横田商會が、大阪に常設映画館の千日

前電気館を開業した。それ以降、全国各地に「電気館」を
名乗る映画館ができた。当初は寄席や芝居小屋を改造した
ものや小規模なものが多かった。太田の電気館はこまつ座
という芝居小屋の後になったものであった。歌舞伎座を模
した建築で、中は二階席があった。（左図）



大正 12 年頃の電気館
（『明治・大正・昭和 思い出のアルバム太田』収載）



大光院

文中に「新田郡處女等の聯合會と愛国婦人會の支部と合はされしもの」とあるように新田郡聯合婦女會と愛国婦人会群馬支部との合同で新田郡聯合婦女會第一回總會が午前十時から開催された。歌子の講演はそれに続いて行われたが演題は不明である。「上毛新聞」の記事によれば、總會が電氣館と真砂座の二ヶ所で開催されたとあり、歌子の講演も午前中は電氣館、午後は真砂座で行われたと思われる。午前の講演に集まったのは、三、四年生ほどの少女や乳

飲み子を抱き乳を飲ませている者もいた。午後には十八、十九歳の娘が来ていたので、午前中の話よりも内容を少し難しいものにして話した。来場者は歌子の話に引き込まれて、彼女を見つめ、一言も聞き漏らさないようにしていた。その姿を笛子は「いじらし」と書いている。歌子は、あなたがたは母となる人たちである。結婚して生まれてくる子の善し悪しは、父親よりも母親の育児に対する考えや実際の行動に関わってくる。そのことを自分の心に深く刻みゆるぎのないものにするべきであると述べた。

講演終了後に、一行は大光院を見学した。大光院は、徳川家康が新田義重をはじめ同家代々の追善のため、開山に芝増上寺の観音国師の弟子然譽（呑龍）を迎えて慶長十八年（一六一三）に建立した寺である。義重山新田寺と号し、浄土宗である。呑龍は墮胎、捨子を制止し、困窮者の子どもを弟子として養育したことから子育て呑龍と親しまれ信仰を集めた。

金山城は、文明元年（一四六九）に新田庄の領主新田岩松家純が城普請をし、居城とした山城である。天正十八年（一五九〇）、豊臣秀吉の侵攻により落城し、それ以後廃城となった。その後全山を松で覆い、御林として幕府の管理下におかれ、生産される松茸は將軍家に献上された。

新田神社は新田義貞公を祀る神社で、金山の山頂付近の

金山城址に鎮座する。新田義貞の裔孫である新田俊純と地方有志は、明治八年（一八七五）に社殿を創建した。明治九年（一八七六）に県社に列せられ、明治一八年（一八八五）と翌明治一九年に明治天皇の皇后（昭憲皇太后）が参拝された。「皇太后の宮の御座所となりしところとてみす打かけしあり」とあるのは、その時に大光院に立ち寄られたことを記している。

中島飛行機成作所は、海軍機関大尉中島知久平が大正六年（一九一七）に海軍を退官し、新田郡太田町に飛行機研究所を開設したことに始まる。昭和六年（一九三一）に三井物産と提携して中島飛行機株式会社となった。大正・昭和前期の戦闘機生産を担った軍需会社である。大正八年に「中島式四型」を完成し、民間会社航空機が軍に採用されたのを機に生産技術能力を向上させ、大正十四年には東京工場を設置し発動機生産を行った。国内における飛行機の製造は人々の間に興味と関心が強かったと思われる。「こもみん」と思っていたのに、帰りの汽車の時間が迫っていて門の前を通り過ぎたという一文には残念に思う気持ちがみえる。

多くの人に見送られて四時四十五分発の帰りの汽車に乗った。陸軍大尉と一緒に、金山城がすぐれた要害であることなどの話があった。群馬版の新聞には、今日の講

演会の記事が掲載されており、そこには「三千の少女」が集まったと書いてある。電気館の中は二階席があったというが、定員は三百人程度ではなかったかと思われる。三千という大げさな表現にめずらしい話だと笑ったとある。来聴者の白粉もつけず、髪なども黒く染めることもしない様子を思い出し、新聞の記事を面白く思ったと書いている。「上毛新聞」の記事では具体的に「出席處女會員二千六百餘名婦人會員三百餘名其他來賓を合して實に三千餘名」と書いている。文中の「新聞の群馬版」とあるのは何新聞のことか不明であるが、「上毛新聞」の記事と同様のものであろう。

汽車の中から月を眺めながら和歌を詠み、浅草に七時頃着いた。帰宅して、今朝の見送りの礼をいうと、夫は自分一人を残して知らぬ顔して行ってしまったくせにと笑いながら少し恨みがましくいった。その夜は絵はがきなどを見て旅の話をして夜を更かしたとあり、微笑ましい若い夫婦の様子が書かれている。

最後に、歌子や長田の君の和歌を書き入れて、少しは彩りのある文章に見えるようにしてほしい。編集所に出すのには、今一度書き直しをするとあるので、どこかに掲載することを前提に、歌子が紀行文を書くように進めたのだらう。投稿先は『なよ竹』（実践女子専門学校）ではないか

と推測しているが、欠号が多く確認できない。

ペンネームの「竹由子」は「松田笛子」と自分の名を出すことにためらいがあり、「笛子」を「竹」と「由」に分けて名前にした。もし他に良い名があればつけてほしいということを記している。松田家に対してはばかるところがあったのだろう。

処女会と愛国婦人会

処女会は、近世以降の村落に青年男子の集団である「若者組」（男子青年団の前身）に対し、女子の集団「娘組」があった。娘たちは夕食後に「娘宿」に寄り集まり、糸繰りや針仕事をやり、歓談し、そこに寝泊まりした。「娘組」「娘宿」と処女会の関連性は明確ではない。

処女会は地域の同窓会や裁縫の会などの再編成、婦人会からの分離、独立、新団体として各地に生まれてきた。地方の処女会を全国的な組織に入れて指導するという考えから、処女会中央部が大正六年（一九一七）に設立された。内務省嘱託の天野藤男は、地方の、特に農村部の娘たちに対して、処女会に参加するように呼びかけた。彼は処女会中央部を設立した当初から女子教育家を訪ねて設置の趣旨と意義を説明し、理事就任を依頼している。天野藤男が理

事に迎えた女子教育家は、棚橋絢子、跡見花蹊、三輪田真佐子、下田歌子、鳩山春子、山脇房子、嘉悦孝子、吉岡弥生、穂積松子である。天野は『農村處女會の組織及指導』で、地方、特に農村部の若い未婚女性たちが都会に憧れるのを戒め、良妻賢母となるための実際的な料理や衛生などの講習会を開くことを事業の一つとして取り上げ、実地に学ぶことの意義を述べた。

大正十年頃の「上毛新聞」の記事によれば、新田郡處女會は設立以降、講演会などの事業を行っている。大正十二年四月九日の「上毛新聞」には「（群馬）県下の處女會は百三十團體會員一万六千二百三十一人賛助員千五人ある」と記されている。群馬県下の処女会の団体数、会員数についての記事については正確かどうか疑問であるが、多くの地域に設立されていたと思われる。

処女会中央部に、歌子がどの程度関わったかは不明である。「上毛新聞」大正十一年五月二十七日の「上毛家庭欄」に、歌子は「小学校卒業後の女子の進路Ⅱ家庭自修法についてⅡ」と題して寄稿している。小学校を卒業後、家庭の事情で女学校に進学できない人は多いと思われる。小学校を卒業した少女が、都会の華やかで軽薄な風俗は女子の虚荣心をそそる機会が多く危険である。女学校教育を受けることができないときは自修を勧めたい。女学校程度の講義

録は出ている。修身、国語、家事理化学に関する有益な書物を選び、正しい知識の向上と健全な思想の増進に努めなければならぬと述べている。天野が農村の若い女性は都会に憧れるのではなく、その地域に止まって処女会の事業である講習会などに参加して、知識や実的な技術を見につけるという考えと共通するものがある。

愛国婦人会は明治三十四年（一八九一）、奥村五百子的主張する軍人遺族救護を目的にする会である。近衛篤磨、小笠原長生、堀内文治郎、近衛貞子、下田歌子、山脇房子、奥村五百子が集まり、会を創立する準備をし、会名を「愛国婦人会」とした。歌子が起草した趣意書には「願わくば君達が、半襟一掛の用を節し、其も資を積みて之に充てよ」という五百子の言が書き入れられ、賛成、助力を求めた。一條悦子等三十九名が発起人となり設立された。理事に一條悦子、近衛貞子、島津田鶴子、大山捨松、谷玖満子が就任、歌子は岩倉久子等とともに評議員に就任した。さらに毛利安子等二十二名に評議員を委嘱した。その中に蜂須賀隨子の名が挙げられている。明治三十四年四月から奥村五百子は地方遊説を始めた。愛国婦人会を拡張するために役員を中心に地方遊説が積極的に行われ、京都、大阪、広島、佐賀などに支部が設立された。明治三十六年六月六日、群馬県では県会議事堂において奥村五百子の演説会が開か

れた。聴衆約八百余名、即時入会者は四十六名であった。

大正九年五月、愛国婦人会通常総会が日比谷公園で開催され、歌子は第五代会長に就任した。以後昭和二年まで会長を務めた。大正十三年から十五年に評議員として松田笛子の名が見られる。『春の旅』の文中にある「長田の君」は、笛子と同じ大正十五年の評議員の一人、長田仲子ではないかと考える。「竹内の君」は不明である。なお昭和七年五月の愛国婦人会通常総会で、笛子は評議員に就任、蜂須賀笛子の名で記されている。

下田歌子の演説

歌子は、早く一人前の人となって天皇や国家のために役立つような人になるようにと説き聞かせるような演説を行ったとある。その「御言葉は強きかと思へはやさしく弱きかと思へは熱して」、会場の人々は歌子を見守り、一言も聞き漏らさないように熱心に聞いていた。笛子自身も引き込まれて、話の内容に同感し、ここに集まってきた人だけでなく歌子の教えを実行したらどんなにいいかと思い、涙ぐましくなったと書いている。

歌子の演説の様子を、佐瀬徳三は『當世活人画』で、「演説は上手にあらず」、「一時間弱の演説、抑揚なくしかも言

辭無味淡泊なり、されど其言はんとする腹案は、すらすらと口を衝いて出て、毫も滯滞の苦なく、傍聴者をして快感を起さしめざるも、倦怠を生ぜしむる程でもなし、此時間中一度もコップに手を觸れず滔々辨じ終はりし所、講義的にせよなれたる所なくば出来ぬ藝なり、言語總て平易にして、聞き苦しき漢語洋語を交へず『文明とか申しまして』『日本女子、最少し擴めて東洋女子の改良……』『二十世紀の女子』などの流行語がチラ／＼耳立てるのみ』と書いている。『當世活人画』は明治三十八年に刊行されたもので、それ以後講演を重ねて『春の旅』のように時には強く、時には弱く語るようになったのだろう。歌子の演説ぶりは、そのほかにも『現代名士の演説振』（小野田亮正著 博文館 明治四十一年）などにも見られる。

笛子の著作『松浦宮物語』を読むと、彼女の教養の深さを思わせられる。文学作品をよく読んでいたと思われるが、『万葉集』などの和歌集を読み、自身も和歌を詠むことが作品の理解を深めているのだろう。また『春の旅』には、どこか控えめな様子もうかがわれ、笛子の人柄を思わせる。生来病弱な笛子にとっては、信頼する歌子や知人たちの旅はどんなにか嬉しく、神社や寺、歌子の講演に興味や感動をしていたことが十分に理解される。

笛子の和歌のいくつかは、下田資料の中の文学部歌会に記録されている。歌子は歌会に提出された和歌に競点を付し、添削指導を行っている。次回には笛子の和歌と歌子の指導について考察したいと考えている。

本稿を書くにあたり、太田市役所広報課の方々には高山神社と電気館の距離の事などについてご教示をいただき感謝いたします。

最後に、「實踐國文學」前号の『蜂須賀正韶と笛子（一）下田歌子研究（一）』に掲載した蜂須賀家三姉妹の写真の説明に誤りがあるとご指摘をいただきました。正しくは写真に向かって前列中央の三姉妹、右から年子、中央笛子、左小夜子です。ご所蔵様にお詫び申し上げます。また「通信省」とあるのは「通信省」が正しく、訂正します。

注 『愛国婦人會史四十年史』三六七頁に「杉田笛子」とあるが、「松田笛子」の誤りである。また笛子の評議員就任の記事は、『愛国婦人會史四十年史』では大正十三年、十五年の通常総会の記録として出ている。大正十四年は、雑誌『愛國婦人』五一八号（大正十四年六月）の「總裁殿下の御招宴」（『愛國婦人會々報』の内、六七頁）出席者の名の中に笛子の名が記されている。

参考文献

- 萩谷朴著『松浦宮全注釈』若草書房 一九九七年
- 吉田幸一著『松浦宮物語伏見院本考』古典文庫 平成四年
(古典聚英6)
- 古典籍複製叢刊刊行会編『松浦宮物語』雄松堂制作・発売
昭和五十六年(原裝影印 古典籍複製叢刊)
- 紀淑雄著『小山田與清』裳華書房 明治三十年(偉人史叢
第十八卷)
- 小野則秋著『日本文庫史研究』臨川書店 昭和五十四年
- 佐瀬徳三著『當世活人画』春陽堂 明治三十二年
- 天野藤男著『農村處女會の組織及指導』日本図書センター
一九八四年(近代日本女子教育文獻集第14卷)
- 渡邊洋子著『近代日本女子社会教育成立史―処女會の全国
組織化と指導構想』明石書店 一九九七年
- 十重田裕一編『映画館』ゆまに書房 二〇〇六年(コレク
ション・モダン都市文化／和田博文監修19)
- 石川弘義ほか編著『大衆文化事典』弘文堂 平成三年
- 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編著『演劇百科大事典』
一九八三 新裝復刊
- 湯本豪一著『図説明治事物起源事典』柏書房 一九九六
- 三井光三郎著『愛国婦人會史』日本図書センター
一九九六(愛国・国防婦人運動資料集1)
- 飛鋪秀一編著『愛国婦人會史四十年史』日本図書センター
一九九六年(愛国・国防婦人運動資料集2)
- 明治・大正・昭和思い出のアルバム太田 あかぎ出版 昭和
五十八年(監修篠原藏人)
- 群馬県地名 平凡社 一九八七年(日本歴史地名大系
一〇)
- (おおい みよこ・実践女子大学非常勤講師)

[illegible]

院より、
 前より不
 有る部
 一の地
 うとく
 なりてこ
 まるや
 すうと
 秋に松
 全路の
 中へふ
 なる
 いはれ
 大城の
 本居氏
 の国を

— 92 —

紫の口と、うろくも、
ももあて、くわのも、うろく
うろく、あ、

の力に日教や田原の如
 く御りまじかり編
 りてゐるへ編集所に出さ
 せ一応答ふべしん牛由
 といふところをいふと
 上解といふ代におきか
 へるなり